

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



ジェームス・アボット・マクニール・ホイットスラー（一八三四—一九〇三）
『ヴェネツィア十二点のエッチング集』

（最初のヴェネツィア・セット）より『小さなヴェネツィア』

一八八〇年

紙、エッチング

一八・七×二六・四cm

ホイットスラーは、評論家ジョン・ラスキンとの裁判で破産に追い込まれていた一八七九年、ヴェネツィアを訪れた。本作品は、このとき出資した画廊の依頼で制作されたエッチング集のうちの一枚である。刷りにこだわったホイットスラーは、約束の一〇〇部の制作を終えずに世を去ったが、本紙左下のチョウのタグは、画家手ずからの刷りを示す。

ヴェネツィア南東、リド島のサンタ・マリア・エリザベッタ海岸から本島方向を眺めたとされる。中央の帆船をはさんで右側にサン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂やサンタ・マリア・デッラ・サルテ聖堂が、左側にバラツォ・ドゥカーレ（元首公邸）やサン・マルコ広場の鐘楼が並び、実際とは左右が反転している。画面手前に簡略的に描かれたブリッコラ（船の道しるべとなる杭）がどこか哀愁を感じさせ、インクの拭き残しによる陰影が抒情性を高めている。

（上席学芸員 貴家映子）

No.
154
2024年度 | 夏 |

美術館の穴とでっぱり

館長 木下直之

当館では、月に一度、学芸員が日頃の研究を同僚の前で発表する研究会が開かれます。非公開ですが、その成果は、やがて展覧会や『アマリス』の「研究ノート」、紀要での論文となって公表されます。

誰がどんなことに関心を持ち、そこからどんな問題を引き出そうとしているのかをお互いに知るとても貴重な機会です。当館の所蔵品を素材にすることが多く、制作の背景、作品の意味、収蔵される経緯などの情報が共有され、結果として、コレクションへの理解が深まります。

学芸員は十人いますから、一年で一回りします。最後に、学芸員ではなく実技室担当の先生が登場するところが恒例です。中学の美術教師が、数年間このポストについて、教育普及活動を牽引します。年度末の発表は、一年間の活動の検証の場なのです。

この春の奥村祐喜先生の発表は、実技室のソフト面（活動）ばかりでなくハード面（空間）にまで話が及びました。実技室の床には穴がある。床が中心に向かって三センチ傾斜しており、それで水を抜く。まったく知らない事実にびっくりしました。普通、床は平らのはず。まさか部屋の真ん中に穴があるなんて。

穴が設計段階から用意されていたことは、研究会で示された古い設計図に明らかでした。水をふんだんに使う活動が構想段階から想定されていたのです。子どもたちが思い切り絵の具と遊ぶ「えのぐ教室」は、今も続く人気のプログラムです。やがて出現する美術館に、誰がどんな夢を語り合い、どんな絵を描いたのか興味深いですね。

この話を一番面白かったのは、間違はなく私でした。瞬時に、二つの風

景が思い浮かんだからです。ひとつは、某県立美術館の某有名建築家が設計した極端に水の使いにくい実技室、現場を軽視したデザイン優先の空間に教育普及担当の学芸員が嘆いていました。あとひとつは、逆に床の中心がでっぱっていている美術館です。

訪れるたびにつんのめりそうになります。気をつけていても必ずそうなる、危険極まりない美術館です。なぜそんなデザインにしたのか、気になってしょうがないので、とうとう館主の窪島誠一郎さんに尋ねました。無言館の名に反して、館主は饒舌です。建設の途中で、来館者をつまづかせたいという思いが突然湧いてきた、深い意味はない、人は（オマエは？）意味を求め過ぎる。という具合に、煙に巻かれました。

窪島さんは、世の中にどこにもない美術館を求めてきました。一九九

七年開館の無言館に先立って、七九年に建設した信濃デッサン館もそうです。デッサンとは未完成の習作であり、それを一堂に会してみせる美術館は、それまでどこにも存在しませんでした。この建物も自らのデザイン、シンブルに、丈夫に、そして何よりも安上がりにと考えてモデルにしたのは「ゴキブリホイホイ」だったと、しばしば自嘲気味に語ってきました（『美術館のある風景』彌生書房、一九九四年）。

しかし、どうしてどうして、樗の木の小口を敷き詰めた床は見事です。開館当初は多少の凹凸があったかもしれませんが、たくさんの訪問者を迎えられることで、次第に踏み固められ、黒光りするそれこそどこにもない美術館の床へと化したのです。でっぱりと黒光りの床を有するふたつの美術館をひとつの視野に眺める展覧会を、床に穴のある美術館で開催することになりました。むろん床の展覧会ではありませんが、美術館とは何かを考える展覧会にもなるはず。この話、つづけないわけにはいかない。

* クラウドファンディング

アートとみどりの散歩道 再生プロジェクト

静岡県立美術館クラウドファンディングチーム

当館の本館へといたる緑の散歩道

「彫刻プロムナード」には、十四の貴重な彫刻作品が展示され、多くの来場者の方々に、世代を超えて楽しまれてきました。当館では、この環境の整備や作品の修復に継続的に取り組んできましたが、近年の物価や人件費の高騰、施設老朽化にともなう修繕費の増加などにより、限られた予算の中で作品の修復を実施することが難しくなっています。その影響から、一部の彫刻作品では、塗装

の剥落や腐食、さびといった損傷が目立つようになってしまいました。

「プロムナード屋外展示のメンテナンスをどうかお願いします。数年前から何となく気にはなっておりまして。

本日久しぶりに見て悲しくなりました。」

これは一例ですが、お客様からのこうしたご意見にも背中を押され、今年度、クラウドファンディングを実施することを決意しました。

彫刻の修復には、専

門家の技術と多額の費用が必要です。今回のクラウドファンディングでは、とくに損傷が目立つ彫刻作品二点の修復を目指しています。

そのうちの一点、本館前の広場に設置され



トニー・スミス《アマリリス》



清水九兵衛《地簀》

ている《アマリリス》(一九六五年作、一九八一年鑄造)は、ミニマル・ア

トとも関連が指摘されるアメリカの彫刻家トニー・スミスの作品です。

ステイル製の本作品には塗料が施されていますが、最後の塗り替えから十六年が経過して、劣化が進み、作品の色調は黒からグレーに退色しています。また、塗装に亀裂が入って、さびが生じた鉄材が現れたり、黒い塗膜層が失われ、白い下地が露出したりしています。本館と緑豊かな園地を結ぶ要とも言える本作品の再塗装や腐食個所の防錆処置は、プロムナード整備のなかでも喫緊の課題です。

もう一点は、プロムナードの中腹に位置する、アルミニウムを素材とした抽象彫刻で知られる清水九兵衛の《地簀》(一九八六年)です。土台の盛り土に沿う横長の形態や周囲の緑に映える色調が設置場所と親和

する、他に二つとない作品です。作品の表面には、作者独自の、神社の鳥居などを想起させる朱色「京都レッド」が施されています。しかしながら、前回の塗り替えから三十年が経過した本作品では、塗料の広範囲での剥離やアルミ素地の白錆が発生、黒ずんだ部分も目立ち、朱色の鮮烈な印象が失われています。オリジナルの「京都レッド」が緑に映える日が再び訪れるよう、いち早い修復の実現が望まれます。

次世代までつづく県民の皆さまの憩いの場として、また、県外からのお客様を迎える観光の拠点として、傷んだ彫刻を再生し、この散歩道のさらなる魅力向上に努めたい。本紙読者の皆様も、ご支援をご検討ください。

*不特定多数の人が他の人々や組織が実施する事業に賛同し、その財源の提供などを行うこと。

今回は「ふるさとチョイスGCF」というウェブサイトで、あるいは郵便局からのお払込みを通じてご寄付をお願いします。ふるさと納税制度の対象となりますので、(二千元を超える部分について)所得税や住民税の還付・控除が受けられます。ご寄付の方法等の詳細は、七月下旬を目途に当館ウェブサイトなどでお知らせします。

企画展

カナレットとヴェネツィアの輝き

会期 7月27日(土)～9月29日(日)

ヴェドゥータと呼ばれる、風景画の一分野があります。都市や古代の遺跡等の眺めを、精密な透視図法で描くもので、主に18世紀のイタリアで大きく花開きました。本展でご紹介するカナレット(本名ジョヴァンニ・アントニオ・カナル、1697～1768年)は、このヴェドゥータを描いた画家を代表する一人です。

ヴェネツィアで生まれた彼は、劇場の舞台画家だった父ベルナルドから最初の手解きを受け、23歳頃から故郷の眺めをヴェドゥータとして描き始めました。カナレットが描き出すこの水の都の景観は、爽やかに晴れた空、きらめく水面、整然とした街並み等、今日もなお「ヴェネツィア」という言葉で思い浮かべるイメージを作り出したと言ってもいいでしょう。

カナレットのヴェドゥータは、この街を訪れる旅行者に非常な人気を博しました。わけでもグラランド・ツァーと呼ばれる一種の修学旅行でやってくる、イギリス貴族の子弟達が争って買い求める品でした。彼らはカナレットの作品を自国に持ち帰り、ヴェネツィアへの憧れを一層掻き立てていったのです。

こうしてイギリス人士に愛好されたカナレットは、40代の終わりから50代の半ばにかけて、イギリスに渡って作品を制作しています。彼が描くイギリスは、しばしばイタリアのような鮮やかな空を背景にしており、この点でも同地の人々には好ましいものであったでしょう。

このようにイギリスで大変に人気



カナレット《カナル・グランデのレガッタ》1730-1739年頃 ポウス美術館
The Bowes Museum, Barnard Castle, Co. Durham, England



クロード・モネ《バラツォ・ダーリオ、ヴェネツィア》
1908年 ウェールズ国立美術館、カーディフ
Angueddfa Cymru-Museum Wales

のあった画家なので、カナレットの作品は、大部分がイギリスにあります。そこで今回の展覧会では、主にイギリスの美術館や貴族の館から、作品をご出品頂くことになりました。

テートやヴィクトリア・アンド・アルバート博物館のように、よく知られた場所もあれば、ホウカム・ホールやコンプトン・ヴァーニーのように、日本での知名度があまり高いとは言えない館からのご出品も頂きます。

本展は、これら多数のご所蔵者にご協力頂くことで、約70点の作品により、ヴェドゥータの世界をご紹介します。

します。当館は風景画の美術館なのですが、このヴェドゥータという分野だけは、まとめてご覧頂く機会がこれまでにはありませんでした。この展覧会は、当館としては初めて、そして日本で初めて、ヴェドゥータを正面から取り上げる展覧会なのです。

展覧会では、カナレットに先立つ時代のヴェネツィアの美術や、カナレットと同時代の画家や直接の後継者に当たる画家達の作品を合わせてご紹介します。さらに、モネやシニヤックなど、後の世代の描くヴェネツィアの姿もご覧頂きましょう。多くの芸術家達を刺激してきたヴェネツィアの輝かしい姿を、ヴェドゥータを通してお楽しみ下さい。

(上席学芸員 新田建史)

収蔵品展

カナレットとヴェネツィアの輝き展関連展示
ピラネージとローマの景観

会期 7月18日(木)～10月6日(日)

古代ローマの時代から同時代に至るまで、「ローマ」に関わる作品を描き続けました。

ピラネージの版画作品で、最初に大当たりしたのが、本展示でご覧頂く、『ローマの景観』連作です。名所であった同時代の建築物や、古代ローマの遺構等を、精密な遠近法を駆使しながら、強烈な迫力ある画面に描き出しています。彼が20代の半ば過ぎ以降、生涯を通じて描き続け、最終的には合計135点にまでなりました。この作品の大成功があったからこそ、ピラネージは経済的な基盤を確保し、活動を続けることが出来たのです。

この連作は多くの点で新機軸を打ち出しているのですが、その一つが、バロックの舞台美術に見られる2点透視図法を景観版画に応用し、ダイナミックな景観画を作り出したことでしょう。また、同時代の他作品と比べて、画面が大きいのも特徴です。彼が短期間師事したジュゼッペ・ヴァージという版画家の作品が概ね30×20cm程度であるのに比べ、この『ローマの景観』連作では、約40×55cm程度なのです。迫力ある画風を大画面で展開した訳ですから、さぞ人々



ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ
《トレビの泉》、『ローマの景観』より 1746?–48年? 静岡県立美術館蔵

の目を驚かせたことでしょう。

カナレットの描くヴェネツィアの景観が、晴朗で、広々とした眺めを作り出しているのに対し、ピラネージの描く「ローマ」の姿は、猛烈な勢いで奥へと広がっていく空間でありながら、莫大な質量を感じさせ、穏やかさというよりは興奮を感じさせます。カナレットが静かに街を描写するならば、ピラネージは都市を激烈に歌い上げます。

これほど二人の画風は異なるのですが、ピラネージもまたイギリスからのグランド・ツアー客に熱烈に愛好されました。ピラネージはイギリ



ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ
《V》、『牢獄』(第2版)より 1761年 静岡県立美術館蔵

スに行くことはなかったのですが、考古学者としての顔も持っていた彼は、1757年にロンドンの王立古物研究家協会の名誉会員に認定されています。

本展では当館の所蔵品の中から、『ローマの景観』の内33点をご覧頂く他に、幻想的な『牢獄』(第2版)連作等も併せて展示します。カナレットを始めとするヴェネツィアの景観の後は、迫力あるローマの眺めをお楽しみ頂きましょう。「カナレットとヴェネツィアの輝き」展は全国各地を巡回しますが、ヴェネツィアとローマ、両方のヴェドゥータを一度に見ることが出来るのは当館だけです。この静岡の地で、18世紀の旅行者達を魅了した景観画の数々、この機会に是非ご堪能下さい。

(上席学芸員 新田建史)

「カナレットとヴェネツィアの輝き」展の舞台はヴェネツィアですが、こちらの展示では、ローマの眺めをご覧頂きましょう。ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ(1720～1778年)は、カナレットより一世代程後に、ヴェネツィアの本側の領地であるメストレ近郊のモリヤーノで生まれた版画家、建築家、考古学者です。

20歳の頃にローマに出てからは、この「世界の首都」で活動を続け、

中村宏の少女イメージについての考察

上席学芸員 川谷承子

闘争する少女のイメージ

この論考で着目したいのは、昨年度新たに当館の収蔵品に加わった《4半面の反復》(図1)にも表わされている中村作品における少女のイメージについてである。中村作品に少女のイメージが現れるようになって

たのはいつ頃からであろうか。そしてこの少女は中村作品においてどのような意味を持つのだろうか。

最も早いものとしては1959年制作の《蜂起せよ少女》(練馬区美術館蔵)(図2)の中に現れている。この作品では、城塞や機関車、黒と黄色の縞模様の標示物などの複数のモチーフがモニタージュ風に組み合わされており、少女は、画面中央の機関車の窓枠から内側に広がる空間の中に描かれている。少女は長い髪をなびかせ、上半身には詰襟に金ボタンのついた学生服を身につけて、眼を見開き、視線はまっすぐに前を向いて鑑賞者の方を見つめている。少女のイメージは画面に対して大きくはないサイズで描かれているにも関わらず、視線に引き寄せられるかのように、存在感を放っている。この少女のモチーフが登場した背景には、学生運動が盛んであった1950年代末という時代の要因があったと、中村自身語っている¹⁾。当時、女性の大学生がデモに加わることは非常に稀有な現象であり、中村はそういう時代にあえて学生服姿の少女を絵画の中に描いた。本作には、もとは「全学連に捧ぐ」という副題がついており、全学連の決起を訴える意図が込められていた。山田諭は、この作品に表された少女について「革命家としての学生服をきた少女」(フランスの映画女優ブリジット・バルドー)²⁾と記している。「ブリジット・バルドー」の記述の根拠は文中で言及されていないが、ロジェ・ヴァディム監督の映画で小悪魔的なヒロインを演じ話題となっ



図1 《4半面の反復(11)》2019年
キャンバス、アクリル 静岡県立美術館蔵

ていたバルドーは、1950年代末、セクシーな若い女性として日本においてもイメージが流通していた。若い女性を描くにあたって、中村が当時人気のある女優の姿を参考にしたということとは考えられるが、中村が描いたこの学生服を着た少女には、豊かな髪の毛を除き、性の表象はみられない。

翌年の《革命首都》(1959年)や60年代安保闘争を主題にした《階段にて》(1959~1960年)の中にも、長い髪をたなびかせ、まっすぐ鑑賞者の方を向いて見つめる少女が描かれている。

嶋田美子は、中村がこれらの作品の中で用いた少女のイメージには、1950年代前半に中村が拠り所していた「日本美術会」が、政治からの影響を受けてそれまでの方針を修正していったことに対する批判と皮肉が込められていると解釈している。その上で、「少女たちは」単に可愛い、愛玩の対象ではなく、闘争の混乱の最中にあって、観者に対してその主体的な参加を促すかのようだ」と、指摘している。

以上のことから、中村の絵画の中に少女



図2 《蜂起せよ少女》1959年 合板、油彩、グラフィア写真 練馬区立美術館蔵

のイメージが現れたのは1959年の《蜂起せよ少女》からで、1960年までに描かれた少女は、同時代の反体制意識が形となって表わされたイメージであったと整理することができる。

セーラー服の少女と「エロティシズム」

それでは次に、中村の作品の中に、セーラー襟のついた制服にプリーツスカートと身に着けた少女がはじめて現れるのはいつごろからであろうか。それは、《階段にて》から3年後に、中村が装丁を手掛けたプレヒトの『亡命者の対話』(現代思潮社、1963年)の挿図《少女乱舞》であった。この図の中で少女たちは、髪の毛を振り乱し、逆立ちをしたり、膝を立てて寝転がっ

たり、ひっくり返ったり、周囲の目線をま

ったく気にも留める様子もなく自由な体勢をとる様子で描かれている。なかにはスカートがめくれ、下着や、黒い太ももまでのストッキングや靴下止めが、露わになって

いる様が描かれており、少女のイメージに性的な表象の要素がみられる。この作品以降、セーラー服の少女のイメージが、油彩画では、『修学旅行』（1964年）、『遠足』（1967年）、『円環列車・A―望遠鏡列車』（1967年）、『円環列車・B―飛行する蒸気機関車』（1968年）などへと展開している。顔は、のっぺらぼうか、一つ目で表されることもあり、時には少女が骸骨と戯れるイメージや、時にはセーラー服の生地が光沢を帯び、服の物質性が強調されたイメージなどもあらわれてくる。グラフィックの仕事の中でも、1969年の『現代詩手帖』の表紙絵をはじめ、1970年代初頭にかけての本の挿図の中に、繰り返しセーラー服の少女が描かれており、セーラー服の少女は、機関車と並んで、中村作品の重要な要素を担うキャラクターの一つ



図3 中村宏《少女乱舞》
ヘルトルト・プレヒト『望命者の対話』現代思潮社、
1963年、p.57より転載

となっていた。

中村のセーラー服の少女について、尾崎しんじんと嶋田美子が、「エロティシズム」の観点からそれぞれ独自の指摘を行っている。

尾崎しんじんは、1990年に出版された雑誌に掲載された文章の中で、各地の美術館に収蔵されている中村宏の作品は1950年代の政治的状況を示す作品が多く、1960年代に中村宏が描いた「女学生シリーズ」は、「エロ」という理由で、美術館の常設展に展示されることがなく、認知されていないと指摘している。

一方、嶋田美子は、1960年中ごろ以後の中村のセーラー服少女が描かれた絵画は、これまで詳細に論評されてきていないことを指摘している。その理由として、このモチーフが語られる際に使われる「エロス」や「フェティッシュ」といったキーワードが、これら作品が描かれた時代と現在とは、ニュアンスがかなり違ってきているにもかかわらず、それに替わる言葉や視点を見つけられないからであると指摘している。

なお、中村自身は、セーラー服の少女を描くことになったきっかけの一つとして、澁澤龍彦からの影響を挙げている。澁澤は、1950年代後半から1960年代に「エロティシズム」に関する論考を多く執筆している

が、澁澤が論じる「エロティシズム」と、中村のセーラー服の少女のイメージにはどのような関連があるのだろうか。

以上をまとめると、中村が1963年に降に描くようになったセーラー服の少女イメージは、1959〜1960年に中村が描いた少女のイメージから変化している。そしてこのセーラー服の少女イメージは、「エロティシズム」に引き寄せて読み取られることが多いことが、尾崎や嶋田から指摘されている。しかし、「エロティシズム」の意味は、これまで十分議論されていないことから、今後はこの点に着目して考察をすすめていく必要がある。

- 1 動画「中村宏 インタビュー 後編」、静岡県立美術館、2022年 <https://smaoishizuoka.shizuoka.jp/archive/>
- 2 「今、アンデパンタン展中です。「蜂起せよ少女」というのをかきました。（中略）「全学連に捧ぐ」が副題です。貴方も又「少女」であるべきです。否すでそうだと規定されるでしょうか？ 僕らの反体制意識は、それだけで「少女」の資格なのです。」（1959年2月25日付、中村が親しい知人に送ったとされるハガキより）、嶋田美子「蜂起せよ少女―制服少女を解体する」『応答せよ！ 絵画者 中村宏インタビュー』、図書出版白順社、2021年、p.28の引用箇所より
- 3 山田諭「1950年代「ルポルタージュ絵画」の展開」中村宏 図画事件1953―2007、東京都現代美術館編、東京新聞、2007年、p.37
- 4 嶋田美子「蜂起せよ少女―制服少女を解体する」、『初出「あいだ」220号、月刊あいだの会、2015年4月、前掲書に再録
- 5 尾崎しんじん「内視鏡からの視点―されど中村宏の1959年―」『機関』15―中村宏特集、海鳥社、1990年
- 6 嶋田、前掲書
- 7 前掲動画

本の窓

ヨン・ラーセン 著
野口高明、米田成一 監修、
武井摩利 訳
『微隕石探索図鑑』
創元社 二〇一八年



みなさんは隕石を拾ったことはありませんか。本書によれば、隕石とはとても身近なもので、一年間に1㎡あたり一個も落ちてくるというのです。うそうそ、そんな頻繁に見たことないよ、というのは正解。それは極小の世界のこと。落ちてくるのは直径0.1mmほどの微隕石です。本書では、著者が採取した微隕石の写真を通じ、微隕石の形態学が繰り返し広がられます。地球の気圏に突入することで生まれた微隕石の独特な形状は、ドラマティックと形容したくなる力強いかたちをしています。こんな豊かな造形が、道路脇のチリの中にもひそんでいると想像するのはなんとも愉快なことではないでしょうか。

身近な場所から未知の世界へと導かれる、本書はそんな驚きに満ちた一冊です。
(上席学芸員 喜寿孝臣)

新しい職場と出会い

学芸課 薄田大輔

令和六年四月より学芸課に着任しました薄田大輔と申します。出身は埼玉で、就職を機に名古屋で約十年過ごしました。静岡での生活は初めてですが、県立美術館には、卒業論文の研究テーマであった狩野派の絵画を拝見するために訪れて以来、毎年のように足を運んできました。池大雅や円山応挙など、非常に充実したコレクションの前に、絵画を見る力を育てていただいたと思っています。

さて、この原稿を書いているときは、着任して二カ月ほどで、まだ市外にも足を延ばせていませんが、静岡駅周辺を歩いているとブロンズ像やプラモデルを象ったポストなど、様々な彫刻やミニチュアがあるのに気づかされます。これらは全くの専門外ですが、大学のゼミの課題で、街なかにある彫刻などについて調べて以来、公共の場に展示されたアートを何気なく眺める癖がついてしまいました。なかでも、静岡散



ウィリアム・マクエルチュラン《出会い》

策中に心惹かれたのが、市役所前の通りに設置されたウィリアム・マクエルチュランの《出会い》というスーツ姿の男性の彫刻です。独特でユーモラスな形状にどこか見覚えが、とじつくり観ていると、昨年まで利用していた名古屋の吹上駅構内に同じ作者の作品が設置されていたのを思い出しました。駅構内を慌てて走るスーツ姿の男性に「PLEASE DO NOT RUN! SO FAST THAT YOU MISS THE MOST BEAUTIFUL THINGS IN LIFE (そんなに早く走らないで。人生で最も美しいものを見失ってしまうから。)」というメッセージが添えられています。初めて社会に出て、余裕もなく駆け回っていた自分の心に響いたのか、今でもよく覚えています。一方《出会い》にはメッセージが添えられてなく、シチュエーションも分かりません。街中の偶然の出会いに「はっ！」と驚く？二人の関係は…この出会いはどんな展開を迎えるのか…など様々な想像してしまいます。静岡に来てすぐに同じ作家の彫刻と出会ったのも何かの縁なのかもしれません。美術館での仕事は人と人の繋がりが重要だと思っています。様々な「出会い」を大切にしながら仕事に励みたいと思います。これからどうぞよろしくお願いたします。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館)
工事等による休館：7月8日～7月17日、10月8日、12月16日～2025年1月3日
※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoe.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
企画総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

「カナレットとヴェネツィアの輝き」展 イベントのご案内

開幕記念ミニ・マルシェ

7月27日(土)、28日(日)10:00～16:00(予定) / 当館エントランスホールほか

画家の生地になんで、イタリアをより身近に感じていただけるようなミニ・マルシェ(イタリア語ではメルカート)を開催。ピザやジェラートなどのフードに、雑貨、ワークショップ・ブースなどが出店予定です。

学芸員美術講座

「カナレットの景観画とカメラ・オブスキュラについて」

8月4日(日)14:00～ / 当館講堂

特別講演会

「景観画の役割とは？—近代ジャーナリズムの始まり」

8月10日(土)14:00～ / 当館講堂
講師：高梨光正氏(愛知県立芸術大学准教授)

館長美術講座「カメラ・オブスクラをめぐる話」

8月18日(日)14:00～ / 当館講堂
講師：木下直之(当館館長)

その他、関連のワークショップなどを開催予定です。詳細は、当館ウェブサイトをご覧ください。

※表紙の作品(ホイッスラー作《小さなヴェネツィア》)は、「カナレットとヴェネツィアの輝き」展に展示予定です(静岡会場のみ)。